

5月19～21日に台湾の台北市で開催された第二回台湾国際神経学会に参加しました。僕にとって留学先で一緒だった呂先生を訪ねて2013年に台中市に行ってから以来、二回目の台湾です。今回は仙台からの直通便（タイガーエア）を使い、移動時間が短かったので、家族同伴で行ってきました。ドイツから帰って早や6年が経ちますが、家族にとってはそれ以来の海外でした。この度の医局日誌は「楽しんだことを中心に報告しなさい」と教授から仰せがありました。僕がいつも学会報告を中心に学術を重視したお堅い医局日誌を寄せているためでしょうか、それとも教授よりも滞在期間が長かったことへの皮肉でしょうか。真意が分かりませんが、確かなことは教授の命令は絶対です。命令を遵守して、学会報告は最小限にさせていただきます。

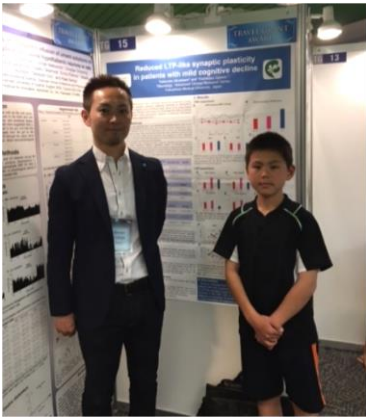
19日の夕方に自宅を出発して、ホテル到着した頃は既に日が変わっていましたので、学会には二日目の20日から参加しました。会場で登録を済ませてから講演を聞いた後に呂先生と会場のそばにあるTaipei101に登りました。曇りの日が多い台北ですが、この日は比較的晴れていて、目下に台北市が広がった景色は最高によかったです。街を見下ろしながらマンゴーアイスを頬張りしました。その後、ロープウェイに乗って猫空に行き、有名な鉄観音茶を飲みました。ここのロープウェイは4台に1台は足場がガラス板になっていて、下が透けて見えるスリリングなものがあるので、それに乗るために多くの若いカップルが並んでいました。自分たちもあと10年若くてチビどもを連れていかなかったら間違いなく並んでいたことでしょう。



その後再び学会会場に戻って Gala dinner に参加しました。台湾に来たはずなのに、余興がなぜかアフリカ部族の踊りでした、また今、台湾でカラオケがブームだと聞いていましたが、メインイベントがカラオケ大会だったことにも衝撃を受けました。Gala dinner の後に呂先生と一緒に台北の士林にあるナイトマーケットに出かけました。この時すでに夜の9時を過ぎており、次男は眠気に耐え切れず寝てしまっていたので、妻と次男をホテルに残し、長男と2歳の長女を連れていきました。ナイトマーケットは年中毎晩開かれるようです。この日は土曜日ということもあり、多くの人でごった返していました。タピオカミルクティーや牡蠣入り台湾風オムレツ、臭豆腐といった台湾の定番 B 級グルメを堪能し、ホテルに着いたのは日がかかって午前1時前でした。夜の大人の世界を垣間見て血が騒いだのか、普段こんなに遅くまで起きていることのない2歳の娘は帰ってからもしばらく目を覚まして興奮していました。



三日目は午前中に宇川教授のご講演を拝聴してから自分のポスター発表でした。家族を連れてきた一番の目的は、子供たちにお父さんのいいところを見せて、お父さんの株を上げることです。前日から息子たちに「学会について来ないか？」と言いつけたのですが、次男には「ホテルでゲームしてる方がいい」と断られ、結局長男だけが面倒臭そうについてきました。会場で宇川教授や知り合いの先生方に挨拶させて、いざポスター発表の時間になったので、ポスターの前に立って座長や大勢の参加者が来るのを待っていました。昨夜のナイトマーケットの後に子供たちが休んでから、眠いのを我慢してこっそり発表の練習をして、発表は完璧です。父親が流暢に発表し、質疑応答にもスマートに答える姿を見て、長男の父親を見る目が変わるのが目に見えるようです。が、待てど待てど、聴衆はおろか座長すら来てくれません。来てくださったのは宇川教授をはじめ数人の知り合いだけ。ちょこちょこ説明して、はい終わり。ランチョンセミナーの時間です。不完全燃焼でした。そこへ長男から「父さん、全然発表してないじゃん！」と、とどめの一撃。計画はもろくも崩れ去りました。



発表を終えて？から、国立故宮博物院に行ってきました。中国の宝物が展示してある大きな博物館です。最も有名なものは翠玉白菜です。写真で見ると立派なもので、本物の白菜を想像して行ってみると、まあなんと小さくて可愛らしいのでしょうか。これはミニチュアか！と思ってしまうほど小さく、少々期待外れでした。その日はホテルの近くの屋台で牛肉麺を食べて休みました。

翌日は呂先生の病院のミーティングに参加するために、台中市に行きました。台北駅から高速鉄道で台中に向かいます。列車はなじみのあるのぞみ 700 系そっくりで、車内にいると台湾にいることを忘れてしまいます。昼下がりに台中市について、バスで病院まで行き、夕方からミーティングに参加しました。呂先生は中国医薬大学の神経内科医です。彼は東洋医学の資格も持っていて、針治療もできます。話を聞くと西洋医学と東洋医学とをうまく使い分けているようでした。また外来診療をしながら合間に磁気刺激や脳波を使った研究を続けていました。彼の上司の蔡教授とも再会の喜びを分かち合いました。僕も少し研究内容を発表して意見交換をしました。その後、呂先生

の家族と一緒に夕飯を食べて彼の家に少しお邪魔させてもらい、来年ワシントン DC で開催される ICCN2018 での再会を約束して別れました。



台湾は予想以上に日本語が溢れていて、特に台北市では中国語はおろか、英語で話しても日本語で答えてくれます。またとても親切な人が多くて、娘を抱っこして地下鉄に乗っていると、すぐに席を譲ってくれました。さらに、僕や家内の実家（島根、鳥取）に帰る時には、まず新幹線で東京まで出て、羽田に行って飛行機で飛ぶので、移動におよそ5時間かかり、待ち時間を含めると大体7時間くらいになるのですが、台湾までは待ち時間を含めても5時間で行けました。台湾をより身近に感じられたと共に、山陰地方が陸の孤島と呼ばれる所以を改めて再認識した台湾出張でした。

呂先生、謝謝、再見！